

# 米づくりから見えたもの

和気町教育委員会教育長

徳 永 昭 伸



今年も何とか田植えを終えることができた。寒い時期から、トラクターでの何度かの田んぼの耕作に始まり、畦づくり、田植えを前にしての肥料の散布、今年は激しい雨の中で代掻きと田植え作業だった。

退職を機に始めた稲作も今年で七年目。全くの素人からのスタートであった。地域の先輩から「米づくりは簡単だから頑張れ」と励まされ、軽い気持ちで始めたものの、聞くとやるとは大違いで、試行錯誤と体力勝負の日である。作業内容は概ね決まっているとはいえ、自然が相手だけに予期せぬ出来事の連続なのだ。モグラによる畦の破壊、稲の何倍もの勢いで成長する雑草との戦い、苦手な蛇との度々の遭遇、年によつては水不足への対応、収穫間際になつてのウンカやすすめめ襲来等、何一つ予定通りに進むことはない。そんな様々な悪戦苦闘の末に収穫できた米。他の農家の人と比べれば量は随分と少ないが、何もないところから自分の手で育てた米を手にした時の満足感、充実感は格別であり、最高の喜びなのである。

ある日、トラクターで田を耕していた時、ふと米づくりの作業は、自分が四十年近く携わってきた教育と多くの共通点があることに気がついた。

一年間の教育計画は決まってはいるが、子どもたちとの関わりの中では、想定外の出来事の方が多くある。その都度臨機応変な対応が求められるのだが、正直もう無理だと諦め、投げ出してしまいたいことも多かった。しかし、最後には何とかなることを信じ、自分を叱咤激励し、一つひとつ乗り切ってきた。そして、気がついてみれば三月、心身共に大きく成長した子どもたちを見ると、一年間の苦勞など吹き飛び、無我夢中で頑張りが、自分が持っている全ての力を出し切ったからこそ味わえる充実感と満足感に浸ったものである。

今年もたわわに実った黄金色の稲を収穫するまで、足腰の痛みを我慢し、「米づくりは人づくり」と自分に言い聞かせ、一つひとつの地道な作業をこなしていきたいと思つている。